

最終講義要旨

中国都市をめぐって：日本の都市化との比較

講演者：斯波義信

日時：2001年2月15日

場所：本館 213

今回は魚住昌良先生と合同で講義している「GE W SS 002J 社会科学II 歴史学《前近代の都市と市民：西欧とアジアの比較》」のうち、私の担当の最後なので、まずこれまで話した日本の事例についてその筋道をまとめ、ついで中国における都市成長の流れの要点をのべる。この二つの事例を合わせて見て、同じアジアでも商業化と都市化の進み具合がどういう経過を辿ったのかを知ってもらい、すでに講義されている西欧のケースと比較していただければ幸いである。

一 日本都市史のまとめ

(1) 日本社会における都市化のおこりは、7世紀末、8世紀に生じた中国の律令都市制度の導入で始まった。すなわち、都城（平城京、平安京）、五畿、七道、六九國、五五五郡、四〇一二郷（里）の制である。人口を約600万とすると、一國は八郡を、一郡は七郷を管理し、また一國当たり8.7万人、一郡当たり0.15万人を治めた勘定になる。唐の制は二都（長安、洛陽）、三二一府および州城、一五七〇県城で、県下は2500人で一郷、これを500人ごとに一里に分けた。人口は5100万人なので、一府州当たり約五県を管轄し、一県当たり約3.2万人を治めた。日本の「國」を唐の府州、同じく「郡」を県と読み替えてみれば、郡を支える人口が小さく、ゆえに日本の地方社会で中級の都会（國）は成長していたが、小都会の規模は小さかったことが分かる。

(2) 中世の変化としては、まず奈良(旧平城京)と京都(旧平安京)を見る。平城京では東端の「外京」一帯で条坊の区画を跨いで建てられていた興福寺、元興寺、大安寺などの大寺院、大伽藍の敷地に盛衰がおこり、外京界限は門前町の景観となった。市場がふえ、辻子(袋小路)、これが通りに抜けた突抜町、新屋町ができて、商工業者、芸能者、興行と歓楽街が生まれた。平城京では条坊制の崩れと市中心部の東や北への移動が生じて、上京と下京の二核をもつ形で再編成された。条坊：一町が一六ヶの方形という町割りが崩れて四面町→四丁町→両側町へと変化し、家持ち層(町人、町衆)が町組をつくり、町組の連合が惣町にまとまり、会所をもって宿老が治める組織になった。いっぽう、武士の台頭とともに、その政権の中枢としての館が各地に起こった。鎌倉郡家のあとに源氏の館が生まれ、政所、問注所、侍所が都市の核となり、外郭線を画し、道路網、武家屋敷、町屋、商工区、座、歓楽街が配置された。

もうひとつの中世の変化は楽市場のおこりである。まだ聖権と俗権とが並び立っていたが、遍歴の聖、山伏、僧侶、芸能人、職人、商人、海民、海賊、山賊、野伏が、湊、河原、浜、市庭、寺社の境内や門前など、「聖地性をもっている境界域=無縁所」を目指して往来するようになり、ふつうの市がこうした無縁所に転ずることを「楽市」「ラクノトキ」といった。この流れから筑前の博多、伊勢の大湊、山田、桑名、和泉の堺、また寺内町であった榎原の今井、近江の山科、河内の富田林、摂津の尼崎などが生まれ、自治を唱え、「老小」「老若」「地下」の衆が今でいえば評議会をなす町が現れてきた。やがて登場してきた戦国大名は、楽市令を公布して、あるいは流通をおこし、あるいは楽市の存続を保証しながら、これを俗権の統制の下に吸収し、近世城下町の秩序が生まれてくる。

(3) 幕末までに大小約300ほどの城下町があった。明治のはじめ、藩籍奉還、廃藩置県をへて市町村制への再編が進められたが、県の大半は江戸時代の大規模な城下町である。

二 中国社会の商業化と都市化

(1) 中国社会でも都市化がすすむ時期には、これに並行して商業化もすすんでいる。20世紀以前には、大規模な遠隔地商業が起こった時期は二回ほどある。(イ) 春秋末～秦・前漢に生じ、いったん衰退したのち、隋・唐初に復活し、(ロ) 唐半ば～宋・元・明・清に至った。そのなかで中国風の「市民社会」のおこりにかかわるのは(ロ)の時期である。(イ)の時期、戦国時代に都市成長があり、市場制度、商人集団の形成があり、秦・前漢には「市制」「市籍・市租の制」による統制色が強まった。唐は県城、府州城、都城に「城坊制」ないし「坊牆制」(＝日本の条坊制)を敷き、秦・漢の「市制」「市籍・市租の制」を再生させ、統制色もきびしかった。唐の半ばから、全土的に運輸業や遍歴商人(客商)の活動が起こり、これと表裏して「商税」(入市税・通行税)が兩税法(780年～)の一税源となった。この結果、A. 都市部では「市制」「市籍・市租の制」が崩壊して官僚の統制が大幅にゆるみ、B. 府州城、県城の城外の農村部に大小無数の中・小規模の市場町(「鎮」「市」「店」)が台頭した。

(2) 宋・元・明・清にかけて、中国の都市史ではじめて市民(坊郭の家)が登場し、大衆消費(七件事:薪米油塩醬酢酒または茶)、大衆演芸(平話、講史、散曲など)、プロト・ギルド(行、行会)が登場し、また卸小売り機構、倉庫業、貨幣信用制度が発展した。その後、客商(遍歴商人)の都市間商業はますます定常化してゆき、同郷商人団体(福建、広東、徽州、四川、蘇浙、山西、山東など)が形成され、その背景の下に出先の都市に「会館」「公所」というギルドを設けた。

(3) 明末～清代になると、(イ)先進地域の長江流域、大運河沿線、東南海岸の新現象として、巨大な鎮(広東の仏山鎮、湖北の漢口鎮、江西の景德鎮、山東の臨清鎮など)が成長し、いっぽう江南デルタでは、特定銘柄の工業製品に特化した鎮が普及した。(ロ)客商や客商ギルドが地元の商人、地元のギルドを圧倒して、事実上、客商の組織が市政を運営するケースが生じた(漢口、重慶、汕頭、沙市、台南)。(ハ)長江デルタの上海、蘇州、杭州などの富裕な都市で

は、孤児院、養老院、貧民救済、都市土木、河川浚渫、共同墓地、防備軍、消防隊の組織・運営を、商人、紳士、富民が会員制で維持する「善堂」「善会」（一種のロータリークラブ）が生まれた。上海市土木局（1911年）は善堂から成長発展したものである。

三 日本・西欧と比較した中国都市

(1) 社会の商業化にともなって都市変化が起こり、市場、市民が成長して、なんらかの自治能力が発展したことで、並行関係がある。

(2) しかしこの商業化が封建政治体制の変革をもたらして、近代的な自治の成長に結びついていった西欧、商業化が近世幕藩体制に組み敷かれていった日本、商業化が官僚帝国の枠内で生じて、政体の解体をもたらさず、むしろ官僚制の強化に結果した中国、このちがいは興味深い。

(3) とはいえ、中国の官僚制の商業化への適応は中途半端なものだった。すなわち、唐初に定めた都城、府州城、県城、以下、郷、里（村）という行政上の中心地（central-place）の階層秩序を、鎮・市の多発と成長にもかかわらず、清末まで頑として変えなかった。なぜだろう？ たぶん一つには、漢語の上で《城＝city》対《郷＝countryside》の二分法がそれなりの歴史性、文化的な含意があり、少々の状況変化があっても用語を変えなかったためだろう。その好例がさいきんの「郷鎮」であり、すでに立派な工業都市でも、県城でない、政治文化的な都会でないというところから、あえて「郷鎮」「小城鎮」という。第二に、《城＝city》観念は夏・殷・周時代の実体概念であり、当時の漢人は城居の民であった。城外における「村」は六朝時代の末に生じたものであり、またその用語として生まれた。夏・殷・周の時、漢人の城の外は「行國の民」つまり遊牧・狩猟系の民の世界だった。第三に、官僚帝国の基礎は農本主義の「収益経済 revenue economy」にあり、市場経済と官僚制は原理的には関係がない。だから、商業収益への依存度が高くなっても、あくまでもこれを補助財源とみなしていた。第四に、官僚制、その科挙制はいったん確立すると、官僚のサイズ、

官僚のポスト数、従って行政都市数を固定化する。人口が増えれば官僚の数を増やすべきだが、それは農本的な収益経済と抵触する。清末の四億人口に対して、唐代と同等の行政をしようとする、8000強の県が必要だが、実数は1300県だった。